

コンテナラウンドユースの取り組み

2015年3月12日

キヤノン株式会社

ロジスティクス統括センター

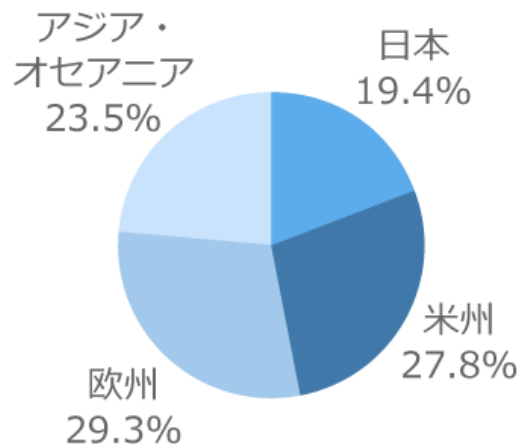
福森 恭一

アジェンダ

1. 会社概要
2. ロジスティクス概要
3. コンテナラウンドユースの取り組み事例
4. 更なる拡大に向けて

キヤノングループ概要(2014年)

売上高 3兆7,273億円



純利益 2,548億円

従業員数 191,889人

連結子会社数 261社

事業分野 売上高による内訳 (%)

イメージングシステム
(ビジネスユニット)



オフィス
(ビジネスユニット)



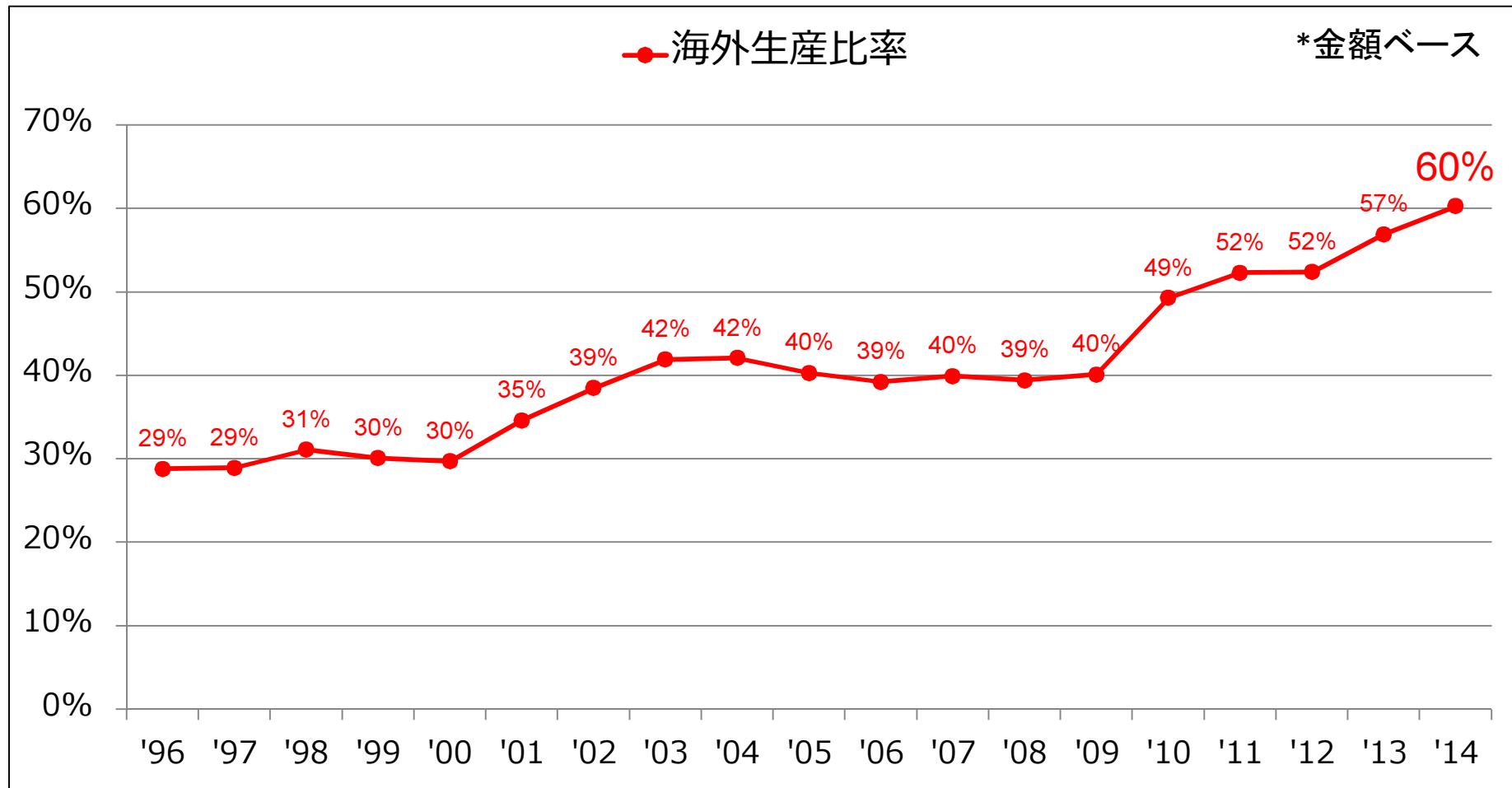
産業機器その他
(ビジネスユニット)



※ 各ビジネスユニットの連結売上高には、ユニット間取引にかかる売上が含まれているため、総計100%となっておりません

1. 会社概要

海外生産比率



【生産の国内回帰】

2年以内をめどに現在4割程度の国内生産比率を
5割以上に上げる方針

ロジスティクスを取り巻く環境（日本）

- トラックドライバーの不足
- 東京港周辺の混雑
- 日本寄港の欧米直航サービスの減少
- 鉄道での海上コンテナ輸送制限
- CSR/環境対応



国内の物流を取り巻く環境は厳しさを増しており、
安定的/効率的な物流インフラ・仕組みの整備が
求められる

物流

グローバルな物流が実現する、効率化と環境への思いやり。

キヤノンは次世代ロジスティクスシステムを運用することで、素早く、安全に、そして低コストな物流をグループ全体でグローバルに展開しています。各地の情報をシステムで一元管理することで、サプライチェーンマネジメントの効率化を実現。また、本社ロジスティクス部門を中心としてグローバルにエコ物流を推進し、CO₂排出量の削減を目指しています。



次世代ロジスティクスシステムと連携する倉庫でのオペレーション

スピード

2011年に物流・貿易システムを一新し、運用を開始した次世代ロジスティクスシステム。生産から出荷、販売、在庫データに至るまで、情報の一元管理が可能となり、市場の需給変動にも素早く対応。トータルな輸送リードタイムの短縮を実現しています。

安全

商品を安全に効率的に運ぶ。ロジスティクス部門では、輸送ルートや輸送業者の選定など輸送品質の向上と、保管や輸送状況を考慮した包装品質の確保に努めることで、顧客満足度の高いロジスティクスサービスを提供しています。

コスト

本社ロジスティクス部門が全世界のグループ主要会社と連携し、ロジスティクス戦略を策定。グローバルベースで輸送費・倉庫費・人件費などのロジスティクスコストを累計し管理・分析することで、コストの削減を推進しています。

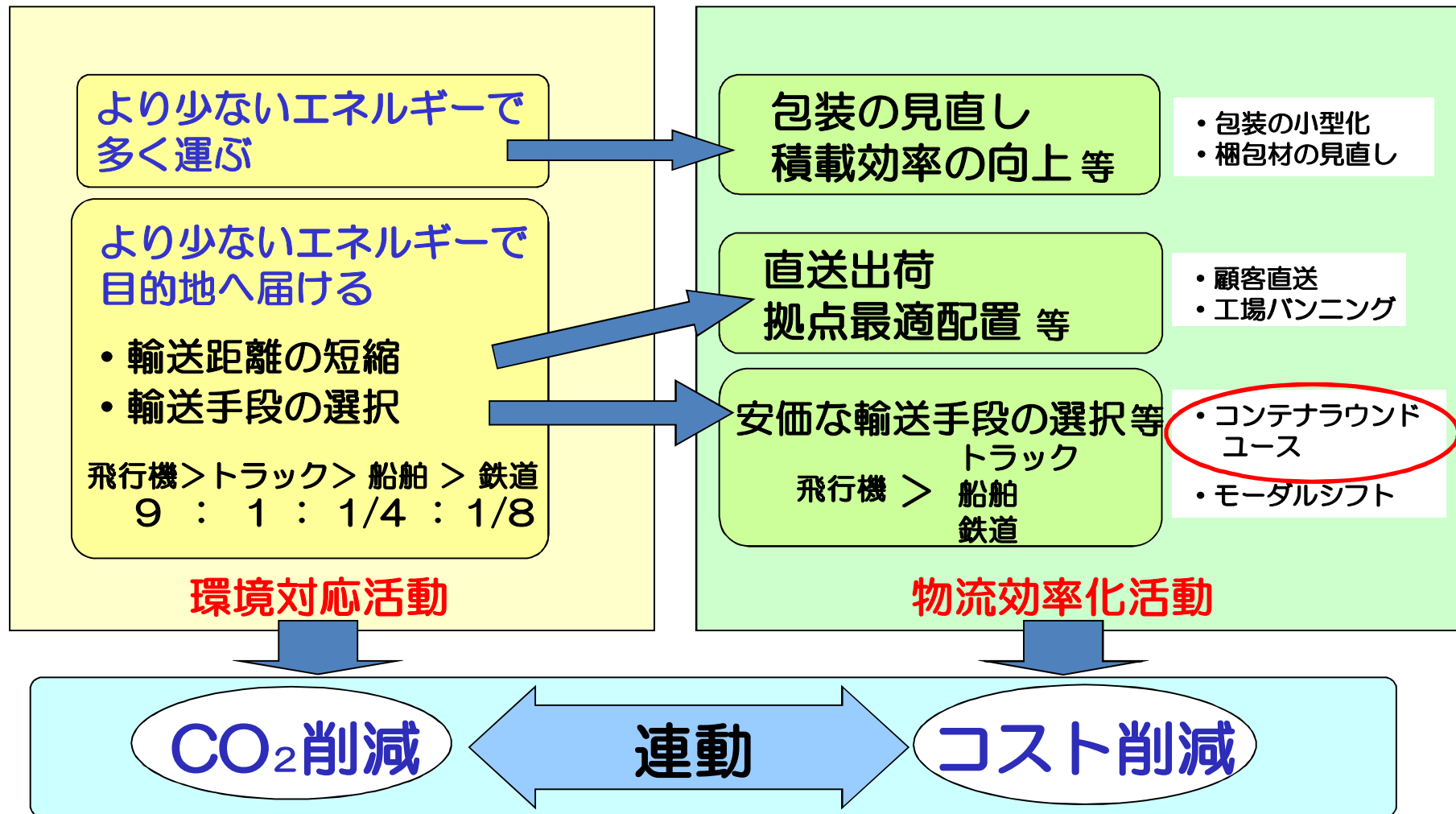
ロジスティクス部門のミッション

「スピード」、「コスト」、「安全性」を徹底的に追及し、グローバルベースの最適ロジスティクスを実現する

ロジスティクス部門の基本方針

- グローバルベースの全体最適ロジスティクスを追求する
- 物流パートナーに全てを任せることなく、自ら企画し、実行する
- 現場および現物を重視する
- コストにこだわり、P/L・B/Sに貢献する

環境物流と物流効率化

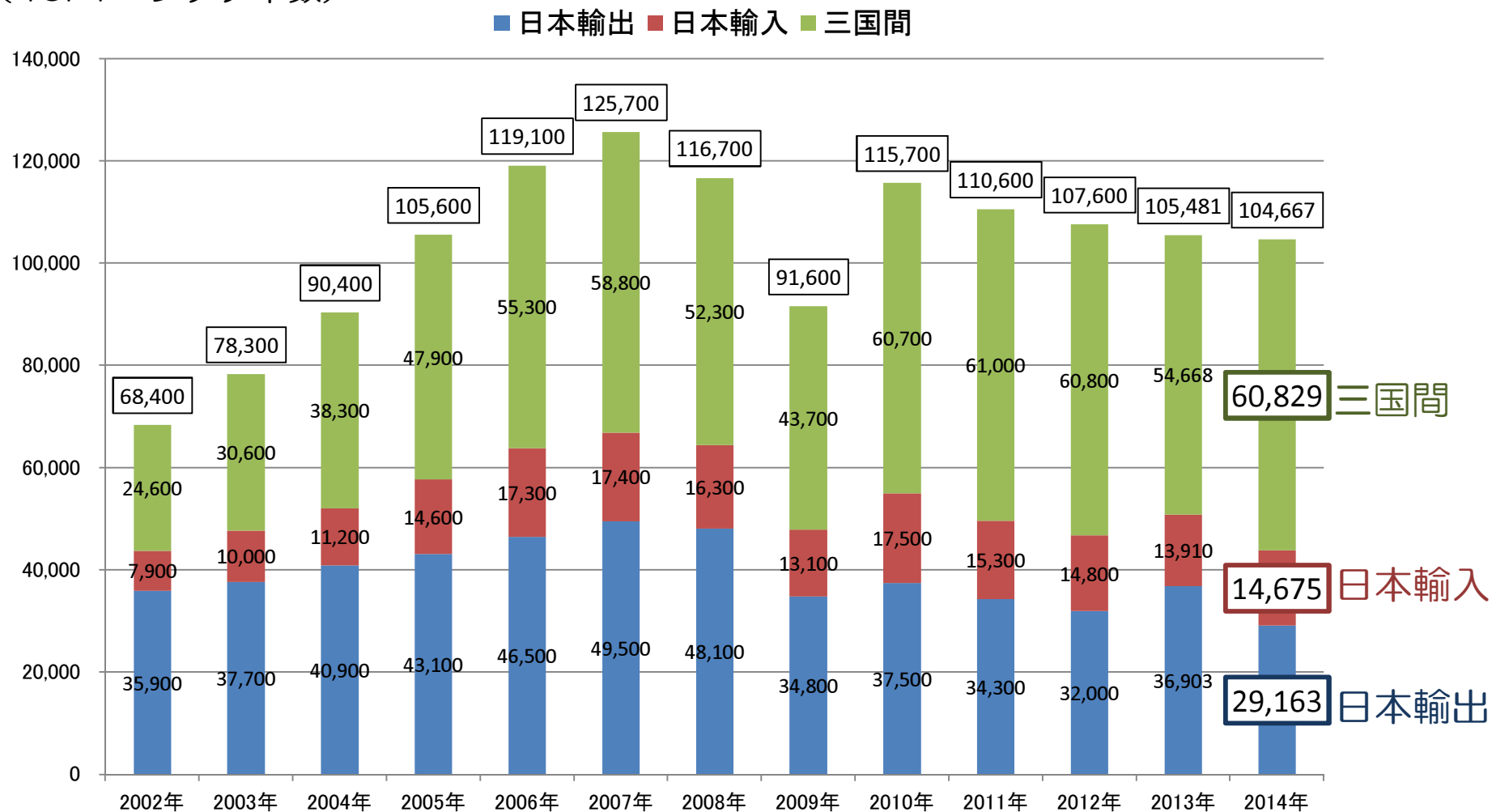


CO₂削減活動と物流効率化活動を連動させることで
ロジスティクス分野での環境負荷低減を推進

2. ロジスティクス概要

貨物量推移（海上コンテナ本数）

(40FTコンテナ本数)



日本発着のコンテナ本数は約44,000本（FEU）

3. コンテナラウンドユースの取り組み事例 具体的な取り組み事例

(1) 自社輸入コンテナを輸出（一部内貨輸送）に再利用



- ① 輸入コンテナをそのまま輸出に使用
(赤城地区・美里地区)
- ② 輸入コンテナを内貨輸送に使用
(取手地区⇒京浜地区)
- ③ 自社のコンテナデポを使用して、再利用
(常総地区)

■ 40FTコンテナ当たりのCO2排出量削減

	① 輸入・輸出 (2往復)		② ラウンドユース		①-②差
	距離Km	CO2排出量(Kg)	距離Km	CO2排出量(Kg)	CO2排出量(Kg)
赤城地区	1,320	1,300	660	650	▲ 650
美里地区	880	866	440	433	▲ 433
常総地区	560	552	280	276	▲ 276

3. コンテナラウンドユースの取り組み事例
具体的な取り組み事例

③自社のコンテナデポを使用して、再利用を拡大 常総地区のコンテナデポ



最大53本のコンテナをオンシャーシーで保管

3. コンテナラウンドユースの取り組み事例

具体的な取り組み事例

(2) 他荷主輸入コンテナを輸出に再利用 (1/2)



東芝が輸入で使用したコンテナをキヤノンが輸出に再利用し、港と倉庫間の空コンテナ輸送を削減

■ ラウンドユーススケジュール

時間	場所	内容
9:00	川崎DC	デバンニング開始
10:00	川崎DC	作業終了後大黒町DCに向けて出発
10:30	大黒町DC	バンニング作業開始
11:30	大黒町DC	作業終了後大井CYに向けて出発

■ 40FTコンテナ当たりのCO2排出量削減

①輸入・輸出 (2往復)		②ラウンドユース		①-②差
距離Km	CO2排出量(Kg)	距離Km	CO2排出量(Kg)	CO2排出量(Kg)
56	56	36	36	▲ 20

(2) 他荷主輸入コンテナを輸出に再利用 (2/2)

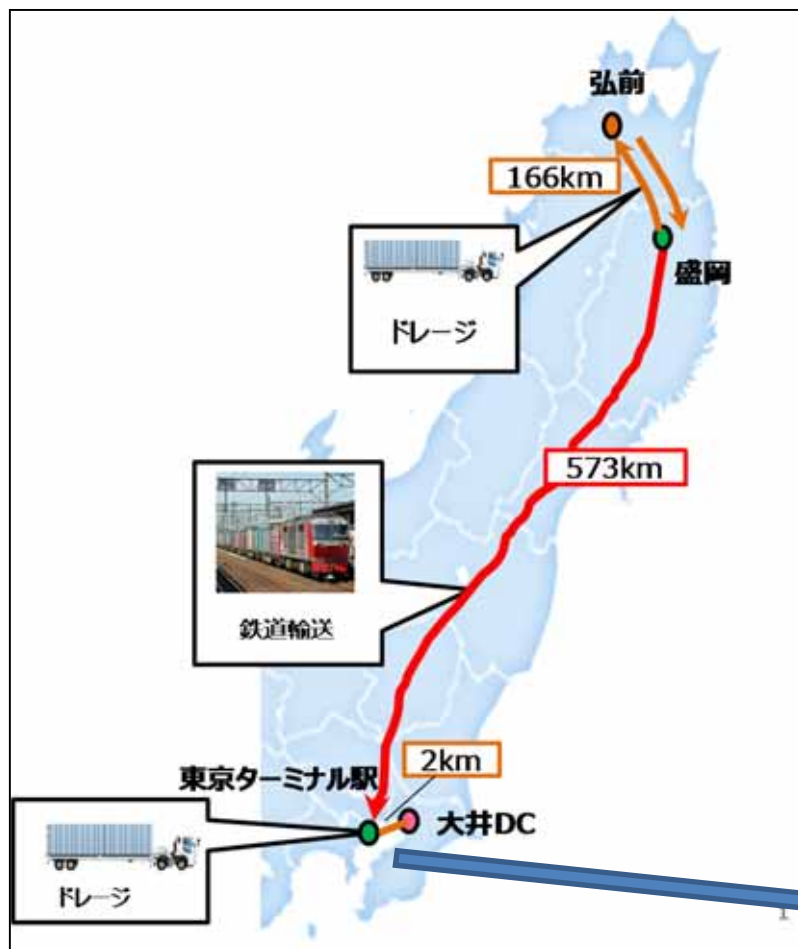
他社とのコンテナ共同利用にあたっての調整項目

- 輸出・輸入で使用されるコンテナの船会社を合わせる
- 輸出・輸入で使用されるコンテナの種類を合わせる
- 輸出・輸入のドレージ業者を合わせる
- 責任範囲の明確化
- 再利用コンテナの品質基準を統一
- スケジュールを時間単位で調整

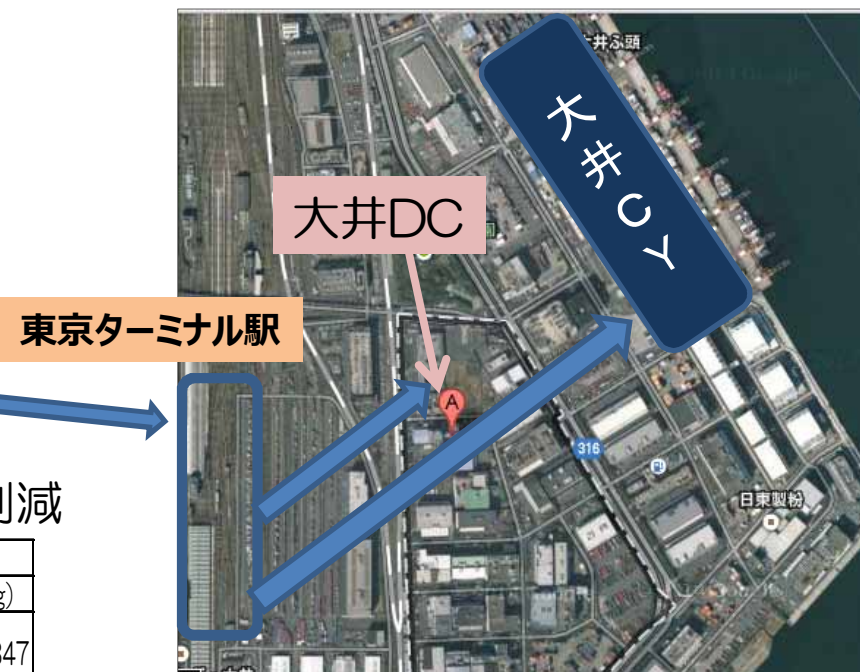
3. コンテナラウンドユースの取り組み事例

具体的な取り組み事例

(3) 複数荷主の輸入コンテナを国内輸送に再利用 (1/2)



- 盛岡駅に滞留している他荷主が輸入で使用した海上コンテナを再利用
- 鉄道（JR貨物）で京浜地区物流センターへ国内貨物を輸送
- 今後、輸出に利用し、大井CYへ搬入



■ 40FTコンテナ当たりのCO2排出量削減

①トラック輸送		②ラウンドユース (鉄道&トラック)		①-②差
距離Km	CO2排出量(Kg)	距離Km	CO2排出量(Kg)	CO2排出量(Kg)
716	795	907	448	▲ 347

3. コンテナラウンドユースの取り組み事例

具体的な取り組み事例

(3) 複数荷主の輸入コンテナを国内輸送に再利用 (2/2)

運用スケジュール



更なる拡大に向けての施策（案）

複数荷主間のコンテナラウンドユースの拡大



- インランドコンテナデポ（ICD）の有効活用
- 輸入/輸出のマッチングをサポートするシステム構築
- 関係者（荷主と物流事業者）間のメリット共有
- 効果的なPR（広報）活動
- 行政の支援



オールジャパンでの取り組みが必要

行政への要望

- 港湾インフラ整備の強化
- ドライバー不足解消に向けた取り組み
- コンテナヤードオープン時間の拡大
- コンテナヤードへの鉄道の引き込み
- 内航船/外航船接続の利便性向上



関係省庁間の更なる連携と強力な支援